

素敵に トクタイム

今月のお客様は……

クラシックデュオの スキテツさん

クラシックが
不思議な曲に!?

——ピアノの杉浦哲郎さん、バイオリンの岡田鉄平さんによるデュオ・スキテツ。コンサート活動を中心に、音楽番組への出演、交響楽団との共演とご活躍されています。聴くだけでは

く、見て楽しい演奏が持ち味だ
そうですね。

杉浦●ほんらのテーマは、「ク

ラシックをパロディにして遊ぶ」
こと。誰もが聞いたことのある
曲に、いろんなアレンジを加え
ています。例えば、定番はベー
トーベンの「運命」と童謡をミ
ックスした、「犬のおまわりさ
んの運命」です。

——ええっ、あの曲に童謡を
加えちゃうんですか。

岡田●どちらもハ短調なので、
意外と合うんですよ（笑）。他

にも、「美しき青きドナウ」の
サスペンスドラマ風アレンジや、
「アイネ・クライネ・ナハトム
ジーク」と料理番組のテーマの
ミックスも人気があります。

——どれもになります!。

クラシックってお固いイメージ
がありましたけど、一気に身近
に感じられそうですね。

岡田●真逆なイメージだから

こそ人を笑わせることができる
のは、お笑いのセオリーですね。
杉浦●クラシックに限らず、
バトカーレのサイレンや新幹線が
駅を通り過ぎる音を楽器で鳴ら
したり、アニメの映像に合わせ



音楽で笑顔を つくりたい！



—宮市立三条小学校での公演。音楽記号に合わせて、手拍子に強弱をつける。

て効果音をつけたりと、広く音楽を楽しめるコンサートになっています。いわゆる「冗談音楽」と呼ばれるジャンルです。

—遊び心たっぷりですね！

大切なのは 「笑いのツボ」

—お二人はいつ頃から音楽を始めたのでしょうか。

杉浦 ● ぼくは四歳からピアノ

を習っていました。あまり真面目に練習していくなくて、楽譜どおりに弾くより、勝手に自分でアレンジするのが好きでしたね。小学生の頃はチューバを吹いていたんですけど、吹奏楽用の校歌の楽譜がなかったので、自分で書いたこともあります。

—すごい！みんなで演奏もされたんですか。

杉浦 ● きれいなアンサンブルにはなりませんでしたね（笑）。でも、自分で書いた楽譜を演奏してもらいう楽しさは、その時に初めて感じました。クラシックピアノからは途中でドロップアウトして、バンド活動を経て、プロの音楽家になりました。

岡田 ● うちは母がピアノの教師だったんですが、バイオリンの音が好きで四歳から始めました。目立ちたがりやだったので、みんながしていないことをしたかったのかも。小学生で「プロになろう」って決意してからは、ずっとクラシック一本でした。

—やっぱり練習も厳しかったんでしょうか。

岡田 ● かなり厳しくて、平日も一日二時間。手をけがしちゃ

いけないから、友達と野球もできません。我慢して練習する中で、息抜きに大好きな車の音をバイオリンでまねしていました。それが「冗談音楽」の始まりになつたのかも。その後、音大を出てバイオリニストになる夢をかなえることができました。

—クラシックへの取り組み

方は対照的にも感じられるお二人ですが、二〇〇四年にデュオを結成し、今年で十五周年。岡田 ● お互いに「冗談音楽」の使い手だとわかつて、意気投合したのが最初です。自分以外にもこんな人がいたんだ！ ってびっくりしました（笑）。

杉浦 ● おもしろいと思うツボが一緒なんでしょうね。バンドでも長続きするかどうかは、音楽的に似ている部分があることが重要だと思います。初めは小さなカフェで友達に披露するくらいだったんですけど、少しずつ大人気の前で演奏するようになりました。拍手と一緒に笑いが来るのが、すごく快感で。

岡田 ● どちらもお笑いが好きだったので、音楽家と芸人、両方の喜びがわかるんです。

大人も子どもも 大歓迎！

—教育番組に出演したり、

学校の芸術鑑賞会にも多数参加したりと、子ども向けの活動も幅広くされていますね。

杉浦 ● もともと三十代、四十代向けのライブが多かつたんです。でも、お客様がお子さんを連れてくるようになって、少しづつファミリーコンサートのようになつていつたんです。それで、子どもでも楽しめる内容を増やしていきました。

岡田 ● 昭和の時代のCMや、



聞き手* 武田むつみ（タレント）

東海地方を中心に、情報番組のレポーターやイベント司会を務める。4歳の女の子の子育て真っ最中。

スギテツ

「クラシックを学ぶ音楽実験室」をモットーに活躍する、ピアノとバイオリンのデュオ。クラシックの名曲とさまざまな音楽・環境音を融合させたコンサートは、年齢問わずファンが多い。演奏技術も高く評価されており、「題名のない音楽会」をはじめ、多数の音楽番組に出演している。



ピアノ・作曲・
編曲の杉浦哲郎

バイオリンの
岡田鉄平

子どもたちに 音楽の楽しさを

——今日も午前・午後と学校の芸術鑑賞会で演奏されてい

るようになりました。同じネタでも、そこに至るまでのプロセス一つで全然反応が違うんですよ。されると、最初は苦労しました。

——そこから、どんな工夫をされるようになつたんですか。

岡田 ● 演目自体ではなく、アーチの仕方を細かく調整す

ました。子どもたちの反応はどうでしたか。

杉浦 ● 盛り上がりました！

岡田 ● 「線路は続くよ」を演奏したら、低学年の子が自然と歌いだしたんです。そういうのは、すごくうれしいですね。

杉浦 ● あと、学校公演ではフイナーレとして、校歌を即興でアレンジして伴奏しているんです。今日は、みんなものすごく大きな声で歌ってくれて。「聞いたことのないくらいの熱量でした。」と先生にも言っていただけなので、いい取り組みなのかな、と思いました。

杉浦 ● なつかつ学校の場合には、演奏後に「実は短調だから悲しい曲になるんですよ」というような音楽的な解説もあります。授業で同じことを聞いたら眠くなっちゃう子もいるかもしれないけど、みんな目を輝かせて聞いてくれます。

——笑いながら楽しく音楽を学べるのは、どの子にとっても貴重な経験でしょうね。

杉浦 ● 校歌ってだいたい三番まであるので、一回一回コード進行を変えたり、強くしたりと工夫するようにしています。自分たちでねらつていたわけではないんですけど、ピアノを習っている子にいい刺激になると変わることもありました。

——他の子にとつても、クラシックに興味をもつきつかけになるかもしません。

岡田 ● いろんな音楽にふれさせてのって、大切だと思います。ぼく自身、子どもの頃から本当にたくさんの音楽のジャンルを聴いてきましたけど、全部無駄にはなりませんでしたから。

杉浦 ● 「クラシック」つまり「ない」っていうイメージの子は多いと思うんです。でも、実際にC.M.でもよく使われるような誰にとつてもなじみ深い曲がたくさんあります。作曲者の肖像画と合わせてユニバーサルに紹介すれば、心に残りますよね。

——お二人の演奏で音楽を好きになった子、絶対にいると思います！

杉浦 ● 今、たくさんの学校を回っていますけど、ぼくたちの演奏がきっかけでプロを目指した、みたいな子が十年後くらいに出てきてくれたら、本当にうれしいですね。

岡田 ● 今はライブや演奏会も含めると、年間で百本以上の公演をさせていただいている。音楽の楽しさを次世代に伝える手助けを、少しでもしていくたらと思います。